

# 開発と特許戦略で食品用キャップ市場ナンバーワンシェアへ

三笠産業株式会社 奈良県北葛城郡広陵町

三笠産業株式会社は、容器のキャップメーカーとして、大正元年の創業当初から、「創意工夫」、「無から有を生み出す」の社風を培い、容器を取り巻く時代の変化を迅速にキャッチするとともに、高い開発力と確かな技術力の確立で、常にキャップ業界をリードし、食品容器のキャップでは30%を超える市場シェアを獲得するに至った。

現在では当たり前となったオープナー不要の合成樹脂製キャップは、まさに同社から開拓がスタートしたといえるが、無人化・クリーンルーム工場建設、また、関西文化学術研究都市内での研究開発や新生産拠点建設など、今もチャレンジが続く。

## 会社概要



会社名：三笠産業株式会社  
所在地：奈良県北葛城郡広陵町  
大字寺戸 53

電話：0745-56-5581  
FAX：0745-57-1565  
創業：大正元年（1912年）  
代表者：代表取締役社長 林田 壽昭  
資本金：377,013,750円  
従業員：400名  
事業内容：プラスチックキャップ、  
容器、各種包装資材の  
製造販売

URL：<http://www.mikasa-ind.co.jp/>



本社



ならやま研究所

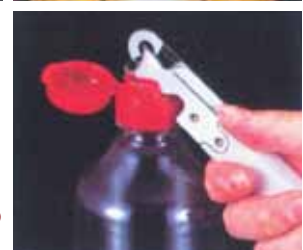
## 樽用の木工呑口からキャップ製造へ

三笠産業株式会社は、大正元年、樽用の木工呑口（酒樽の注ぎ口にねじ込む木栓）製造業として創業。昭和28年からは木工製品から当時新素材であった合成樹脂性キャップの生産に乗り出した。

そして、昭和38年、オープナー不要でシールを引れば簡単に開封できるプラスチック製の「GS王冠」を開発。金属王冠に替わる画期的なヒット製品として同社躍進の基礎となった。



(上)「GS王冠」と「プルオープンキャップ」



(右) リサイクル対応の「打栓式キャップ」

その後、容器自体が樽やガラス瓶などから、合成樹脂や紙、フィルムへと多様化し、さらには、核家族化の進展と消費者嗜好の多様化により、サイズも多様化が進む中、機能性・利便性に優れた「プルオープンキャップ」「バリヤキャップ」「耐熱キャップ」などの新製品が次々に投入され、主力製品として育てている。

また、今やリサイクルといった環境問題が地球規模の問題となる中、流通過程で内容物を保護する強固さ、一方で、使用後の分解の容易さを両立させる技術にも迅速な対応が進んでいる。

## シェア拡大を支える特許戦略

同社では、「GS王冠」のヒット以来、市場での優位確保に不可欠として特許戦略を重視する。



アイデア段階からの出願を前提とし、所有する知的産業所有権は出願中を含め約 370 件に上る。

特許を自社で保有していることは、他社参入への障壁となるのはもちろんだが、キャップを使用する顧客にとっても大きな安心感となる。

特許侵害等のクレームは、キャップメーカーの同社にではなく、顧客である最終製品メーカー等に寄せられるからである。

全国ブランドの巨大食品メーカーを始めとして 3000 社が顧客に名を連ねる同社にとって、販売確保上、特許権などの知的財産は正に最も重要な財産の一つといえる。

### 「チャレンジ精神」と「全社員開発体制」

創業以来、開発に注力してきた同社は、関西文化学術研究都市内に「ならやま研究所」を建設し、専門の開発部署を設けて研究開発に取り組む。しかし、研究開発に関わるのはこの専門部隊だけではなく、「全社員開発体制」が掲げられている。

全社員が業務の中でつかむ顧客ニーズ、さらに、家族をも含めて、日頃の生活の中で消費者として感じるニーズや浮かんだアイデアを製品開発に取り入れており、それらが新製品開発や特許取得に至るケースもあるという。

また、同社は、早くから労働時間短縮や職場の安全向上、人材育成に注力し、労働局基準局からも度々の表彰を受けるに至っているが、近年は人事制度に成果主義を取り入れ、チャレンジ精神を高める人事体制を整えつつある。

常に新しい方向を目指すなか、知的財産と並び、「ヒト」という財産も重要視している。

### 海外も視野に入れ、まず国内拠点固め

平成 6 年、「ならやま研究所」建設と同時期に、関東に主として医薬品容器向けに無人化・クリーンルーム工場を建設した。24 時間稼働のこの工場は、高い品質とともにコストの低減という面でも次の時代を見据えたものである。



無人化工場（上）と  
ならやま研究所（右）  
内部



さらには九州にペットボトル生産拠点を設置し、キャップだけではなくボトル生産にも進出し、高技術と高信頼性を保証する社内体制を活かして、トータルパッケージメーカーを目指している。

海外製品も台頭しているが、それに対抗できる国内でのシェア固め、また、国内での生産拠点固めにまず取り組む方針である。

ただ、これまで品質要求に応え難かった中国なども、技術力は進歩してきており、次のステップとして海外展開の機が熟すのを待つ状況である。

### トータルな研究開発型企业へ

同社は研究開発型の企業であるが、新製品のみに立脚している訳ではない。次々に新しい開発製品を投入しても、いずれは追いつかれる。

金型技術、量産化技術、大ロットから中小ロットまで対応できる生産体制、そして品質管理のノウハウといった、長年培ったトータルな力との一体化こそ同社の競争力といえる。今、同社は、製品、技術、システムの全てにオリジナリティを追求する中で、キャップ・容器業界でのリーディングカンパニーを目指す。（山城、武村）